

津々浦々

(52)

津久見市長 吉本章司

3月14日 震度4の地震発生

3月14日午前2時6分の伊予灘を震源とした震度4の地震の際は、ビックリして飛び起きるなり、「ついに来たか!?!」と思いました。東海(遠州灘沖)・東南海(紀伊半島沖)・南海(高知県沖)・日向灘(宮崎県沖)の連動した、いわゆる「南海トラフ」の地震だと思ったのです。すぐにテレビをつけ、携帯電話の情報を待ちましたが、伊予灘沖という事と津波の心配がないという事で一応は落ち着きました。当初、テレビのテロップでは、津久見市は白杵市・佐伯市と同じように震度5弱と表示されたので、職員も多数参加し災害対策連絡室を立ち上げ、今後の余震の可能性や、南海トラフや津波との関連性、地震による被害、負傷者の状況の情報収集や調査に入りました。その後すぐに津久見市の震度は4に訂正され、被害も市内で一軒瓦が落ちただけに収ま

り、連絡室も同日、午後4時50分に解散しました。

過去にも南が震源でありながら白杵市の方が震度が高かったり、北が震源でありながら佐伯市の方が震度が高かったりしているのが地震のたびに気になっていました。先日、大分気象台の新台長が新任の挨拶に来られた際に、その話をしましたところ、やはり地盤や地質の違いでしょうとのことでした。市民の方からは、津久見は石灰石の岩盤で強固だからという声も聞きますし、私は「中央構造線」という大きな断層が津久見を走っており、地下深くで南と北側の地層がずれていると思っております。

フォッサ・マグナと中央構造線

昨年11月号にも書きましたが、46億歳の地球の年齢の中で、中生代(約2億5000万年～6500万年前)の最初の三畳紀の地層

が網代島にあります。次のジュラ紀と白亜紀の地層が沖無垢島にあり、中生代三紀のすべての地層が津久見に存在しています。

新生代(6千5百万年前以降)になると、年代が近いだけに、火山、陸地、生物等の動きや進化など様々なことが科学的に分析されてきました。

新生代のうち、今から2350万年前～165万年前にあたる「新第三紀」に、真つすぐの陸地であった本州に大きな切れ目ができ、本州は少し曲がってしまいました。西端は新潟県糸魚川から静岡にかけての「糸魚川・静岡構造線」で、東端は後の火山活動等で判らなくなっていますが新潟から千葉辺りにかけての線だと言われています。こうして、ナウマンゾウの名付け親であるドイツの地質学者エドムント・ナウマンが「フォッサ・マグナ」と名付けた70～100km幅の大地溝帯ができたのです。それ以前に存在していたというのが先に述べた「中央構造線」で、糸魚川・静岡線上の諏訪湖の辺りから、天竜川の上流を経て豊川に至り、渥美半島を通じて紀伊半島の伊勢か

ら櫛田川、紀ノ川と抜け、四国の吉野川、石鎚山脈から佐多岬、佐賀関から津久見を通り八代から天草諸島の方へ達する線をいいます。三重町あたりから八代にかけては、阿蘇山の火山活動等によって埋もれてしまっていますが、等高線で色分けされた地図で見えていただければ、そのラインが理解できるでしょう。また、そのラインは途中、佐賀関から大分を通り長崎の方へも分かれています。大分・長崎・八代を結ぶ線を「長崎三角帯」と呼びます。

なお現在、佐伯市の木浦鉱山では、エメリーという、紙ヤスリや布ペーパー(エメリークロス)の研磨材が少量ながら採鉱されているようですが、昔から幾種もの鉱物がその時代の要求で掘られてきた歴史があり、日本で寿命の一番長い鉱山といわれています。

このように、いろんな地質が表れていたりするのも、中央構造線の活動によるものと考えられます。津久見でいろんな地層が見られるのもこの構造線にあるからでしょう。